国際交流基金日本語教育論集
第20号（2024年）　〔教材開発論文〕

B1レベルの JF Can-do 作成

－課題遂行を目標とした教育実践の支援を目的として－

伊藤由希子・夷石寿賀子・池田香菜子・菊岡由夏

〔キーワード〕　JF 日本語教育スタンダード、カテゴリー、CEFR、CEFR CV、
『まるごと 日本のことばと文化』

〔要　旨〕

B1レベルの課題遂行を目標とした教育実践の支援を目的として、『まるごと 日本のことばと文化』中級１、２の言語活動をもとにした JF Can-do（B1）の作成を行った。本稿では、CEFR の枠組み（レベルとカテゴリー）を維持した作成プロセスと、教育現場での活用につなげるために考慮した点について述べる。本 Can-do 作成では、CEFR の共通参照レベルを維持するため、「Can-do のレベル別特徴一覧」と Can-do の構造モデルを参照した。また、『まるごと』に提示される各言語活動の特徴を踏まえ、CEFR と共通する JFS のカテゴリーを付与した。Can-do の記述は、各教育現場が学習者に合わせて活用しやすいこと、また B1のレベルや言語活動の幅をより把握しやすくなることを意図し、言語活動の場面や話題を限定的にしすぎず、幅を持たせた記述とした。

1. はじめに

国際交流基金（以下、JF）は、海外の日本語学習の多様化を背景に、国や地域を越えて日本語の学習・教育・評価を考えるための共通の基盤として、JF 日本語教育スタンダード（以下、JFS）を2010年に公開した。JFS は、ヨーロッパの言語教育・学習の場で共有される枠組みである Common European Framework of Reference for Languages : Learning, teaching, assessment（以下、CEFR[1]）の考え方を参考にしており、「課題遂行能力」と「異文化理解能力」の育成を通じて、相互理解のための日本語の学習・教育を目指すものである。日本語の熟達度として CEFR の共通参照レベル（Common Reference Levels）を採用し、現実場面でのコミュニケーション言語活動を記述した例示的能力記述文（以下、Can-do）で学習目標を設定することによって、学習内容と評価に一貫性のある教育実践を提案している（国際交流基金 2017）。JFS は、「みんなの Can-do サイト」（以下、Can-do サイト）を開発し、Can-do をデータベース化して提供している。Can-do サイトでは、CEFR が提供する Can-do（以下、CEFR Can-do）に加え、JF が独自に開発した Can-do（以下、JF Can-do）を提供することによって、課題遂行を目標とした教育実践を支援している。JF Can-do は、汎言語的で抽象的な記述であ

るCEFR Can-doを日本語の使用場面に文脈化[2]したCan-doである。日本語による言語活動やその場面が具体的に例示されているため、記述内容やレベルがイメージしやすく、日本語教育の現場で学習目標設定、学習活動、学習評価などの教育実践につなげやすい。

2010年のJFS公開時に提供していたCan-do数は、CEFR Can-doが493、JF Can-doが173であったが、その後も利用できるCan-doの数を増やすため、JF Can-doの作成が進められた。2013年にJFS準拠コースブック『まるごと 日本のことばと文化』（以下、『まるごと』）が出版された後は、『まるごと』の『入門〈かつどう〉（A1）』から『初中級（A2/B1）』の学習目標に対応したJF Can-doの新規作成が進められた。目的はCan-doの理解や活用の促進である。その結果、A1とA2のCan-doが充実したが、「自立した言語使用者（Independent User）」（国際交流基金 2017：12）への入口であるB1レベルは、Aレベルに比べJF Can-doの作成が進んでいなかった。B1は初級から中級への過渡期を含み言語教育上重要なレベルであるが、「基礎段階の言語使用者（Basic User）」であるAレベルに比べ、社会参加度が高くなること、学習者の活動範囲が広がること、個人差が多様化することなどから、レベルの把握が難しく、カリキュラムの作成が難しい（櫻井 2016： 4）。各現場が実際に教育実践を行うためには、B1レベルに求められる言語活動やレベルの把握のために参照でき、現場で活用しやすいB1のJF Can-doを充実させることが有益である。

こうした経緯から、筆者らはB1レベルの課題遂行を目標とした教育実践の支援を目的に、JF Can-doの更なる充実を目指し、『まるごと』の『中級1（B1）』および『中級2（B1）』（以下、『まるごと』中級）の学習目標に対応したB1のJF Can-do作成を行った。本稿では、その作成プロセスを記述するとともに、教育現場での活用につなげるために考慮した点について述べる。

2. CEFR Can-doの文脈化

2.1　JFSにおけるCan-do

CEFRは、言語の教育・学習に対して行動中心の考え方をとり、学習者をさまざまな「課題（tasks）」を遂行することを求められる社会的な存在であるとみなしている。「課題」の遂行という視点から言語の熟達度を捉えた共通参照レベルを設定し、各レベルにおいて「言語を使って何がどのぐらいできるか」をCan-doによって例示している。CEFRでは、Can-doは大きく「コミュニケーション言語活動（communicative language activities）」、「方略（strategies）」、「コミュニケーション言語能力（communicative language competences）」の3分類で提供されている。「コミュニケーション言語活動」と「方略」は、「受容（reception）」、「産出（production）」、「やりとり（interaction）」の3つの活動に分けられており、受容は「聞く」と「読む」、産出は「話す」と「書く」、やりとりは「口頭」と「文書」でのやりとりを含む。各活動は、更に

例示的な測定尺度（illustrative scales）に分けられている。例示的な測定尺度は、場面や条件、対象などの特徴に基づく言語活動の分類である。例えば、「口頭でのやりとり」であれば「一般的な話し言葉のやりとり（overall spoken interaction）」という全般的な尺度のほか、「会話（conversation）」「製品やサービスを得るための取引（transactions to obtain goods and services）」「情報の交換（information exchange）」など、９つの尺度がある。学習者の言語学習の過程を、共通参照レベルという垂直方向だけでなく、言語活動の幅の広がりという水平方向の両方で捉えることが可能である。

CEFR で「コミュニケーション言語活動」、「方略」、「コミュニケーション言語能力」に分類されている Can-do を、JFS では「活動 Can-do」「テクスト Can-do」「方略 Can-do」「能力 Can-do」の４種類に整理している。JF が独自に開発した JF Can-do は全て「活動 Can-do」である。CEFR の「コミュニケーション言語活動」と同様に、「受容」「産出」「やりとり」に分けられており、例示的な測定尺度を独自に翻訳した「カテゴリー」[(3)]に下位分類されている。

CEFR Can-do は教師間、教師と学習者間での学習目標やレベルの共有に役立つ一方で、抽象的であるため、実際の教室活動と関連付けて授業設計をするのが難しい。JF Can-do が開発されたのは、そうした教育現場の課題に対応することが目的である（森本他 2011）。そのため、記述における要件を「CEFR の枠組み（レベルと言語活動のカテゴリー）を維持すること」「日本語の使用場面や言語活動がイメージしやすい記述内容とし、学習目標設定や教室活動、学習評価などの教育実践につなげやすくすること」の２点とし（森本他 2011：30）、「自分と家族」「食生活」「旅行と交通」などの独自のトピックを付与している。

『まるごと』の出版以降は、課題遂行を目標とした教育実践の促進を目的に、『まるごと』に提示されている言語活動を記述する方法で JF Can-do を作成してきた。例えば、「友人の結婚や転職などの最近のニュースを、短い簡単な言葉で他の友人に伝えたり、質問したりすることができる。（A2）」という JF Can-do は、「友だちの最近のニュースについて別の友だちと話す」を学習目標とした『まるごと 初中級（A2/B1）』の言語活動から作成したものであり、この JF Can-do と『まるごと』の学習目標は対応関係にある。JF Can-do は、日本語の言語活動が具体的に例示されてはいるが、Can-do に馴染みのない教育現場にとっては「簡単な記事を読む」や「詳しく話す」「内容をだいたい理解する」などの表現で記述された言語活動やレベルがイメージしにくいこともある。その際に、各 JF Can-do に対応した『まるごと』の活動を参照できれば、その会話や作文の例、読解テキストやタスクが JF Can-do の記述内容の実現形として言語活動の内容やレベルを把握するのに役立つ。また、課題遂行を目標とした実践例として『まるごと』の学習デザインを参考にすることもできる。なお、各 JF Can-do が『まるごと』のどの学習目標に対応しているかは、Can-do サイトで確認することができる。

2.2　CEFR のレベルとカテゴリーの利用

JF Can-do を作成するには、CEFR の共通参照レベルの各レベルの特徴を把握すること、また各カテゴリーがどのような範囲の言語活動を含むのかを明確にする必要がある。ここでは、JF Can-do がどのようにして CEFR と共通のレベルとカテゴリーを維持して作成されているのかを述べる。

2.2.1　共通参照レベルの維持

共通参照レベルの分析は、塩澤他（2010）で報告されている。塩澤他（2010）では、共通参照レベルの各レベルの特徴、および CEFR Can-do の構造の把握を行った。CEFR Can-do のうち、言語活動を記述した「活動 Can-do」の日本語訳を対象に形態素解析を行い、レベル別、要素別の分析から、各レベルの Can-do の記述の特徴を明らかにした。分析結果をもとに「Can-do のレベル別特徴一覧」（国際交流基金 2017）を作成し、Can-do の構造モデル（図１）を、【条件】【話題・場面】【対象】【行動】の４つの観点から示した。

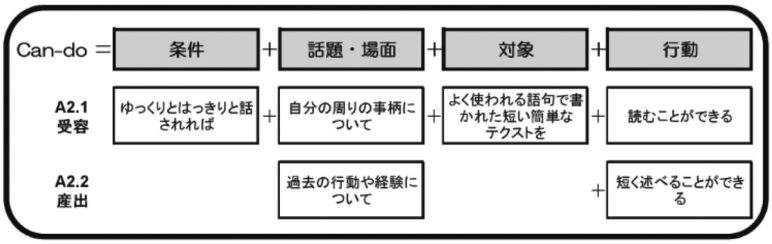

図１　Can-do の構造モデル（塩澤他（2010：36））

JF Can-doの開発を報告した森本他（2011）でも、図１の構造モデルを用いCan-doにレベル別の特徴を入れることで、CEFR のレベルと言語活動のカテゴリーが維持されると述べている。

2.2.2　カテゴリーの維持

CEFR のカテゴリーを維持し、日本語による具体的な言語活動を JF Can-do として記述するためには、各カテゴリーがどのような特徴を持つ言語活動を含むのか、その範囲を把握しておく必要がある。しかし、CEFR には各カテゴリーについて明確な定義はなされていないため、各カテゴリーの名称とそこに含まれる CEFR Can-do から解釈することになる。JFS では各カテゴリーの解釈を「言語能力と言語活動のカテゴリー一覧」（国際交流基金 2017）にまとめており、例えば「インフォーマルな場面でやりとりをする（informal discussion（with friends））」は、「友人・知人とのインフォーマルな場面で、相談や意見交換をする」、「情報交換する（information exchange）」は「何かのために必要な、実質的な情報を交換する」と説明している。JFS 公開当初の JF Can-do は、当時の教育現場の目標記述（例えば「町を紹介す

るテープを聞いて内容を理解し、そこで得た知識を利用して、自分の知っている町について話すことができる。」）を出発点に、このカテゴリーの説明に合わせて言語活動を記述するという作成方法をとっていた（森本他 2011：31-33）。しかし、『まるごと』にある特定の言語活動を JF Can-do として記述しようとすると、「言語能力と言語活動のカテゴリー一覧」の説明だけでは、その言語活動をどのカテゴリーに含めるべきか、判断が難しいという問題が生じた。そこで、「インフォーマルな場面でやりとりをする」「社交的なやりとりをする」「情報交換する」など、特にカテゴリー間の線引きが明確ではない「口頭でのやりとり」で、カテゴリーごとに、公開済みの JF Can-do（以下、既存 JF Can-do）を整理し、その特徴を分析することによって、各カテゴリーの言語活動の範囲を明確にする作業が行われた。

作業手順は次の通りである。まず、同じカテゴリーで同じレベルの全ての既存 JF Can-do を見渡し、言語活動の目的や場面など、類似の特徴がある Can-do をグループ化した。次に、各グループの特徴の要素を抽出し、記述した。この記述は、CEFR Can-do と JF Can-do の中間に位置づけられるものである。そして、各グループの特徴をまとめ、各カテゴリーの言語活動の範囲を定めた。表１に「インフォーマルな場面でやりとりをする」の B1レベルを例として挙げる。

表１　「インフォーマルな場面でやりとりをする」（B1）の言語活動の範囲

「インフォーマルな場面でやりとりをする」 言語活動の範囲：非公式な場での意見・見解のやりとり（例：雑談、相談、約束、調整、交渉）		
CEFR Can-do	言語活動の特徴の記述	各グループの JF Can-do（一部）
a. もし対話者が、非常に慣用句的な語法を避け、はっきりと発音してくれれば、一般的な話題について自分の周りで言われていることのほとんどを理解できる。 b. 音楽や映画などの抽象的または文化的話題についての自分の考えが表現できる。問題の在処を説明できる。 c. 他人の見方に対して簡単なコメントができる。 d. 何をしたいか、どこに行きたいか、誰を選べばよいか、またはどちらを選べばよいか、などを議論し、代案を比較対照できる。 e. もし、標準的な言葉遣いではっきりと発音された話であれば、友人との非公式の議論の要点をおおかた理解できる。	【意見交換】 テレビ、映画、音楽、美術などについて好きなところや感動したところなど感想や意見の交換ができる。	映画やドラマなどの内容について、友人や家族と簡単なコメントや意見を交換することができる。
	【外出、買い物】 外出、買い物をするときにお互いの意見を調整しあいながら、どこに行くか、何をするか、何を選ぶかなどの話し合いができる。	友人と週末サイクリングに行くために、行き先や待ち合わせ時間などについて、自分の意見を述べたり他の人の意見を調整したりしながら話し合うことができる。
	【体験のコメント】 体験（ホームステイ、祭り、イベント、旅行、見学など）や身近な事件、出来事について、印象に残ったことや、感想やコメントを言い合うことができる。	友人と、スポーツ、文化、語学など趣味の教室に参加した後で、印象に残ったところや感想を、ある程度詳しく述べ合うことができる。

f. 興味ある話題について議論する際に、自分の個人的見方や意見を示したり、尋ねたりすることができる。 g. どこに行くか、何をしたいか、イベントをどのように準備するか（例：外出）などの、実際的な問題や問いの解決に関して、自分の意見や反応を相手に理解させることができる。 h. 信念、意見、賛成、反対を丁寧に表現できる。	【困っていること相談】 困ったり迷惑したりしていることに関して、どうしたらいいか、その相手や第三者に相談したり、交渉したりすることができる。	友人とうまくいっていないなどの問題が生じたとき、他の友人にある程度詳しく状況や心情を説明し、解決の方法を相談することができる。

「インフォーマルな場面でやりとりをする」（B1）の場合、13あるJF Can-doを【意見交換】【外出、買い物】【体験のコメント】【困っていること相談】の4つのグループに分け、各グループの言語活動の特徴の要素を抽出し、記述した。【意見交換】のグループの場合、表2に示す4つのJF Can-doから「テレビ、映画、音楽、美術」などについて「好きなところや感動したところ、感想や意見」を「交換する」と特徴を記述した。

表2　【意見交換】の言語活動の特徴とJF Can-do

言語活動の特徴の記述	グループ化されたJF Can-do
【意見交換】 テレビ、映画、音楽、美術などについて好きなところや感動したところなど感想や意見の交換ができる。	ア．友人と、好きな音楽のジャンルやアーティストなどについて、どこがいいか自分の考えを話したり、相手の話に対して簡単なコメントや意見を述べたりすることができる。
	イ．友人と、好きなマンガやアニメなどについて、どこがいいか自分の考えを話したり、相手の話に対して、簡単なコメントや意見を述べたりすることができる。
	ウ．映画やドラマなどの内容について、友人や家族と簡単なコメントや意見を交換することができる。
	エ．環境問題のテレビ番組などの内容について、友人や家族と簡単なコメントや意見を交換することができる。

同様の作業をA2レベルとB2レベルでも行い[(4)]、A2レベルでは【意見交換】【外出、買い物】、B2レベルでは【意見交換】【困っていること相談】というグループごとに言語活動の特徴を記述した[(5)]。そして、A2～B2の特徴をまとめ、「インフォーマルな場面でやりとりをする」というカテゴリーの言語活動の範囲を、非公式な場での意見・見解のやりとりであり、雑談、相談、約束、調整、交渉などを含むと定めた。ほかのカテゴリーについても、同様の作業によって言語活動の範囲を定めた。JF Can-do作成では、以上のように定めた範囲に照らし合わせてカテゴリーを判断することにより、CEFRと共通のカテゴリーの維持を実現している。

3. B1レベルと『まるごと』中級

3.1 B1レベルの特徴

CEFR の共通参照レベルを「全体的な尺度（global scale）」で確認すると、B1は日常生活において、大抵のことに一人で対応できるレベルである。身近で具体的な話題や自分の関心のある話題であれば、大体の内容を理解することができ、経験や出来事を説明したり、自分の意見を述べたりすることもできる。

3.2 『まるごと』中級をもとにした JF Can-do 作成の意義

『まるごと』中級は、B1レベルを目指す海外の一般成人を対象とした日本語教材である。中級 1 と中級 2 にそれぞれ 9 つのトピックがあり、各トピックは「聞いてわかる」「会話する」「長く話す」「読んでわかる」「書く」の 5 つのパートで構成されている。設定されたトピックは料理や音楽、旅行、健康など、海外の学習者にとっても身近で関心の高いものとなっており、「おすすめの日本食レストランについて友人の話を聞く」、「日本旅行の前に旅館への問い合わせメールを書く」など、各パートの学習目標となる言語活動は、海外における日本語使用の実態を反映したものとなっている（藤長・磯村 2018：69-70）。1 で述べたように、B1というレベルは、その言語行動の広がりと多様性のために教育現場において学習目標が定めにくい。そうした課題を持つ、特に海外の教育現場にとって、『まるごと』中級の言語活動を記述した JF Can-do は B1レベルを目指す日本語学習者の関心やニーズに合った学習目標設定や教室活動、学習評価のための手がかりとなるだろう。JFS が主な支援対象とする海外の日本語教育において、B1レベルの課題遂行を目標とした教育実践を促進することが期待できる。

4. JF Can-do 作成のプロセス

4.1 作成の全体像と方針

4.1.1 作成の全体像

『まるごと』に対応する JF Can-do の新規作成は、既存 JF Can-do に『まるごと』の学習目標に対応するものがない場合に行う。よって、本 Can-do 作成は、①既存 JF Can-do に『まるごと』中級の学習目標を対応付ける作業と、②『まるごと』中級をもとに JF Can-do を作成する作業に分けられる。作成の全体像は、図 2 の通りである。

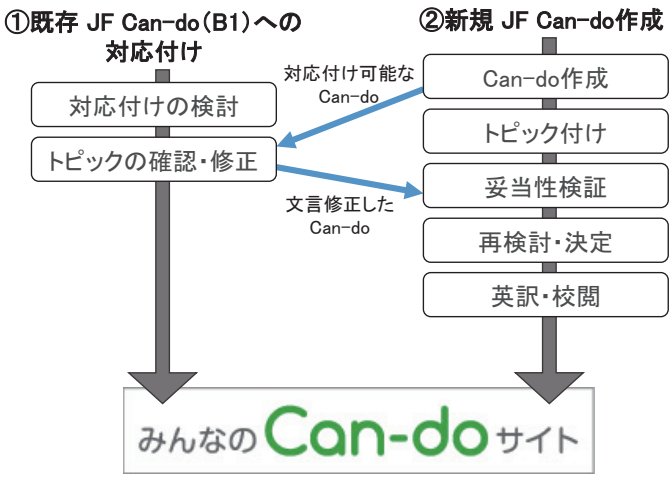

図 2　本 Can-do 作成の全体像

4.1.2　記述の方針

本 Can-do 作成は、場面や話題、対象が具体的に設定された『まるごと』中級の言語活動を JF Can-do に書き起こす作業となる。その際には、『まるごと』の言語活動をそのまま切り取り、そこで設定されている場面や話題、対象に限定した記述とするのか、あるいは、ある程度幅のある記述にするのかという問題が生じる。森本他（2011：35-36）では、「電車の乗り換えのアナウンスを理解することができる。」のように場面や話題が限定的すぎると、ほかの例が思い浮かべにくいとの指摘が挙げられている。JF Can-do はあくまで言語活動の例示であるため、学習目標などに活用する際には、各教育現場が学習者に合わせて場面や話題を書き直す必要がある。そのため、本 Can-do 作成では、JF Can-do の記述から関連する言語活動を想起しやすくすることを意図し、限定的な例示を汎用性のあるものにしたり、「おすすめの音楽についての話を聞く」、「おすすめの映画についての話を聞く」など類似の言語活動が複数ある場合は、個別に JF Can-do を立てずに、例示を並列して一つにまとめたりした。例えば、『まるごと』中級では、「外国の交通機関を利用した経験など、ほかの人の経験談を聞いて、内容とその背景にある価値観が理解できる。」という学習目標があるが、これを JF Can-do では「発音がはっきりしていれば、友人の異文化体験について、ある程度詳しい話を聞いて、どんな経験をしたか、それに対して友人がどう思っているかなど、話の要点を理解することができる。」と記述した。「外国の交通機関を利用した経験」と限定せず「異文化体験」と広く記述することで、異文化での多様な経験を想起しやすくなると考えたからである。更に、一つの JF Can-do に複数の『まるごと』の学習目標を対応付けることも可能になる。一つの JF Can-do に対して言語活動例や実践例を複数提示することは、B1のレベルや言語活動の幅の例示として、また JF Can-do を学習者に合わせて活用する事例として有効だと考えた。

4.2　既存 JF Can-do との対応付け作業

まず B1の既存 JF Can-do をカテゴリーごとに整理し、『まるごと』中級に提示されている90の学習目標および言語活動を確認しながら、その言語活動の記述となる JF Can-do を選定した。対象の『まるごと』の言語活動が、選んだ JF Can-do の実現形として適当かを確認し、対応付けを決定した。その際、記述が限定的なために対応付けがしにくい既存 JF Can-do は、幅を持たせた記述に修正した[(6)]。その結果、25の学習目標を既存 JF Can-do と対応付けた。

4.3　新規作成作業

4.3.1　Can-do の作成方法

各カテゴリーにおける言語活動の範囲が明確化されている「口頭でのやりとり」と、その他の活動（「受容」、「産出」、「文書でのやりとり」）について、それぞれ作成方法を述べる。

4.3.1.1　口頭でのやりとり

Can-do 作成作業の手順と、『まるごと』中級２のトピック９「忍者、侍、その頃は…」パート２（会話する）を例とした具体的な作業内容を表３に示す。

表３　JF Can-do の作成手順

作成の手順	具体的な作業 例：『まるごと』中級２　トピック９　パート２
（１）『まるごと』中級の学習目標と言語活動を確認	学習目標：「ほかの国の歴史や文化などについて、疑問に思うことを質問したり、知っていることを話したりしながら、会話に参加することができる。」 言語活動：忍者について、疑問に思っていることを質問したり、自分の考えや知っていること、聞いたことがあることを話したりする。
（２）「言語能力と言語活動のカテゴリー一覧」、各カテゴリーの言語活動の範囲、CEFR CV を参照し、カテゴリーを決定	自分の考えや感想、心情に基づいて意見交換や調整をするやりとりであるため、「インフォーマルな場面でやりとりをする」で作成することとした。
（３）該当する既存 JF Can-do のグループを決定	疑問点や自分の考えを伝える言語活動であるため、【意見交換】のグループに含めることとした。
（４）該当するグループの既存 JF Can-doの文言を参考にCan-doを記述	【意見交換】の４つの既存 JF Can-do（表２）の文言を参考に、Can-do 案を作成し、検討。以下に決定した。 「日本語交流サークルなどで、興味がある日本の文化や歴史などについて、どこがおもしろいか自分の考えを話したり、相手の話に対して、簡単なコメントや意見を述べたりすることができる。」
（５）元となる CEFR Can-do を特定し、カテゴリーとレベルを最終確認	元となる CEFR Can-do を b, e, f（表１）とし、「インフォーマルな場面でやりとりをする」の B1レベルの言語活動であることを確認した。

作成手順としては、まず（１）『まるごと』中級の学習目標と言語活動を確認し、（２）その言語活動について、「言語能力と言語活動のカテゴリー一覧」と各カテゴリーの言語活動の範囲を参照し、カテゴリーを決定した。その際には、2020年に公開された CEFR の Companion Volume（以下、CEFR CV）の各カテゴリーに加わった新たな Can-do や解説も参照し、齟齬がないかを確認した。そして（３）カテゴリー内のどのグループに含めるかを判断し、（４）同じグループの既存 JF Can-do の文言を参考に、Can-do 案を作成した。表２に示した【意見交換】の例であれば、B1レベルの言語行動を表す表現として、アおよびイに倣って「～について、どこがいいか自分の考えを話したり、相手の話に対して簡単なコメントや意見を述べたりすることができる。」という文言を利用した。4.1.2で述べた通り、限定的すぎる記述は避け、ある程度幅を持たせることを方針とした上で、A2や B2の上下の Can-do とも比較し、B1レベル相当の言語活動であるかという点のほか、記述文がわかりやすいか、カテゴリーの範囲内の言語活動となっているか、リアルなコミュニケーションとして場面が想像できるかという点を確

認しながらCan-do案の検討を行い、確定させた。最後に、（5）確定したJF Can-doを同じカテゴリーのB1のCEFR Can-doと照らし合わせ、どのCEFR Can-doを文脈化したCan-doであるかを特定することで、適切なカテゴリーとレベルに記述できていることを最終確認し、完成とした。完成後は、JFSが設定する15のトピックのうち、Can-doの記述内容と最も関係が深いものを第1トピック、関連のあるものを関連トピックとして付与した。Can-doの活用の幅を広げるため、関連トピックはCan-doの記述内容と緩やかな関連性があるトピックを広く付与した。

4.3.1.2　受容・産出・文書でのやりとり

「受容」「産出」「文書でのやりとり」においても、JF Can-do作成手順は表3の通りであるが、準備作業として、口頭でのやりとりと同様に各カテゴリーの範囲を明確化する作業が必要かを検討し、次の二つの理由から不要であると判断した。一つ目は、口頭でのやりとりと異なり、「言語能力と言語活動のカテゴリー一覧」の説明のみで、ある程度明確に各カテゴリーを線引きすることが可能だったこと、二つ目は、CEFR CVに加わった各カテゴリーの新しいCan-doや解説により、カテゴリーへの理解が進んだことである。ただし、表3の（4）でCan-doを記述する際に既存JF Can-doを文言例として参照できるよう、各カテゴリーでB1の既存JF Can-doをグループ化し、言語活動の特徴の要素を抽出する整理作業は行うこととした。表4は、「産出（話す）」の「経験や物語を語る」のカテゴリーにおける言語活動の特徴の記述である。

表4　「経験や物語を語る」（B1）の特徴の記述

言語活動の特徴の記述	各グループのJF Can-do（一部）
【案内・紹介をする】 人やもの、ニュースなどを紹介する	来客に自分の会社の工場などを案内するとき、機械の機能や生産過程などを、ある程度詳しく紹介することができる。
【順序だてて説明する】 物語のストーリーや料理の作り方などを順序だてて説明する	自分の得意な料理の作り方などを順序だてて友人に説明することができる。
【経験を話す】 自分が経験した出来事や感想などを話す	お土産を渡しながら、休み中に行った場所や出来事などについて、まとまりのある話を友人に語ることができる。
【習慣、関心、希望を話す】 自分の習慣や関心のあること、希望などを話す	朝のジョギングなど、自分の健康法について、始めた理由などを簡単にあげながら、友人に話すことができる。
【自分について話す】 自己紹介や近況など、自分について話す	これまでの経験や今後の希望、抱負などを交えて、まとまりのある自己紹介をすることができる。

各カテゴリーの特徴の記述よりも、既存JF Can-doをグループ化することに焦点を置いた

ため、表１で示した記述のように話題や対象などを細かく例示することはせず、B1としてのレベルや言語活動の特徴も詳細には記述しなかった。

4.3.2　作成において生じた問題と対応

本 Can-do の作成で生じた主な問題点とその対応について、（ｉ）「質疑応答」の追記、（ii）ブログ記事の位置づけ、（iii）「聞いてわかる」のカテゴリー選定、の３点から述べる。

（ｉ）「産出（話す）」の「講演やプレゼンテーションをする」への「質疑応答」の記述

同カテゴリーの既存 JF Can-do には、「いろいろな国の人の集まりなどで、あらかじめ準備してあれば、自分の国の環境問題などについてまとまりのある簡単な発表をし、想定した質問に対応することができる。」の Can-do のように、「想定した質問に対応する」という記述があるものとないものが混在していた。以下の CEFR CV の解説で、「質問への対応」が課題遂行の一部分であることが明記されたこと(7)を踏まえ、Can-do 作成では「想定した質問に対応する」を含めて記述し、また記述のない既存 JF Can-do に加筆を行った。

ability to handle questions: from answering straightforward questions with some help, through taking a series of follow-up questions fluently and spontaneously, to handling difficult and even hostile questioning. （Council of Europe 2020：65）

（質問に対応する能力：人の助けを借りて簡単な質問に答えることから、一連の質問に流暢に自然に対応ができることを経て、難解で敵意のある質問に対処することまで対応できる（筆者訳））

（ii）「産出（書く）」におけるブログ記事の位置づけ

『まるごと』中級では、はがきや手紙などを書く活動だけではなく、Web 上（ブログ記事、SNS、コミュニティサイトなど）で書く言語活動が多く取り上げられている。例えば、異文化体験の出来事と感想をブログなどに書く、自分の好きな詩や格言などの紹介文をブログなどに書くなどである。一般的に、ブログは自身の日々の体験や感想を書くものから、多くの読み手に向けて自分の関心や社会的な問題などについて事実や自分の考えなどを述べるある程度硬い文章までさまざまである。上述した『まるごと』中級のブログ記事を書く活動が「レポートや記事を書く」と「作文を書く」のどちらが適切かが議論の焦点となった。

検討の結果、カテゴリーの特徴を以下のように再確認しカテゴリーを付与することにした。「レポートや記事を書く」は、CEFR CV の解説“more formal types of transactional and evaluative writing（Council of Europe 2020：69）”より公式な業務の処理や評価に関する書く

活動（筆者訳））や既存 JF Can-do（例：「出張の目的や概要などを含む短い出張報告文を書くことができる」など）を参考に、書きこむ媒体に関わらず「書式や構成が決まっているある程度公式な文書」をテキストの典型とした。また、「作文を書く」は「書式や構成などを気にせず、自由に書く文書」とした。CEFR Can-do「現実のことであれ想像上であれ、最近行った旅行や出来事を記述できる。」などを参考に、「レポートや記事を書く」のように限定的ではなく、対象となるテキストの種類を広く捉えた。

（iii）『まるごと』中級「聞いてわかる」におけるカテゴリー選定

『まるごと』中級「聞いてわかる」は、友人や知人とのやりとりの中で、身近な、ある程度まとまった話を聞く活動（音楽やマンガ、映画に関する話題など）があり、聞き手も聞き返しなどのストラテジーを用い、会話に参加しながら聞くのが特徴である。既存の受容（聞く）のカテゴリーには、このような言語活動に当てはまるものが見当たらなかった。

CEFR CV の解説では、“This scale concerns understanding a speaker addressing an audience, for example in a meeting or seminar, at a conference or lecture, on a guided tour, or at a wedding or other celebration（Council of Europe 2020：50）”（会議やセミナー、学会や講演、ガイドツアー、結婚式やその他の祝賀会などで、聴衆に向かって話す一人の話者の話を理解すること（筆者訳））と記述されており、友人や知人とのやりとりの中での聞き手の言語活動とは完全には重ならない。また、やりとりの「母語話者とやりとりする」がより適当であるとの指摘もあったが、聴解活動である「聞いてわかる」をやりとりの Can-do に対応付けるのは混乱を招くとの懸念も挙がった。最終的には、完全には一致しないが CEFR Can-do「もし、はっきりと標準語で発音されるならば、ごく身近な話題についての簡単な短い話の要点を理解できる。」を参考に、「講演やプレゼンテーションを聞く」のカテゴリーを付与した。適切なカテゴリーについては、今後の検討課題としたい。

4.4　Can-do の妥当性についての検証

Can-do で記述された内容について、付与したレベルとその言語活動が妥当なのかどうか確認するための検証が、CEFR をはじめとした多くの Can-do 作成の過程で行われている。本 Can-do 作成においても、森本他（2011）、およびこれまでの JF Can-do 作成者からの情報を参考に、作成した55の JF Can-do に対する妥当性の検証を実施した。

4.4.1　検証作業

検証作業の概要は、表 5 の通りである。検証の内容や手順などは、原則これまでの JF Can-do 作成の検証を踏襲した。

表５　評価作業の概要

評価者	日本語国際センターの講師　９名
評価対象	55の JF Can-do（B1）案（カテゴリー数：11）
評価の観点	①レベルは B1相当か ②記述文はわかりやすいか ③カテゴリーは合っているか ④Can-do から現実のコミュニケーションが想像できるか ⑤トピックは妥当か
評価方法	・評価フォーマットに、上記の評価の観点について２択（○×）で記入 ・気づきなど Can-do に関するコメントなどの自由記述
その他	・必要に応じて既存の CEFR Can-do、JF Can-do を参考することを伝達 ・作業時間の目安は、１Can-do あたり５～６分を想定

評価者は、CEFR および JFS の Can-do やレベルへの理解が深く、日頃から JFS に基づいた授業や教材開発などを行っている日本語国際センターの専任講師に依頼した。検証の対象となった55の JF Can-do の内訳は、新たに作成した52の JF Can-do と加筆修正を行った３の既存 JF Can-do である。作業は、評価者１名あたり２～３カテゴリー、20前後の Can-do を評価するように割り当て、１Can-do を３名で評価するようにした。評価の観点に関しては、前述の通り JF Can-do の記述はあくまで例示であり、関連する言語活動を想起しやすくするという方針で作成をしたため、『まるごと』中級の活動内容と合致しているかについては、評価の対象外とした。

4.4.2　検証結果

表６は、項目ごとの判定の結果である。観点①、③～⑤は、「全員の評価者から○」の評価を得ている割合が最も高かった。一方、「記述文はわかりやすいか」という観点②は「１名の評価者から×」の評価が最も多い。自由記述でも観点②に関するコメントが目立ち、Can-do の記述の「わかりやすさ」を中心に修正作業を進めていく必要性が見てとれた。

表６　評価の観点ごとの判定結果

評価の観点	３名全員○		１名×		２名×		３名全員×	
①レベルは B1相当か	43	78.2%	10	18.2%	2	3.6%	0	0.0%
②記述文はわかりやすいか	17	30.9%	28	50.9%	10	18.2%	0	0.0%
③カテゴリーは合っているか	41	74.5%	13	23.6%	1	1.8%	0	0.0%
④Can-do から現実のコミュニケーションが想像できるか	38	69.1%	12	21.8%	3	5.5%	2	3.6%
⑤トピックは妥当か	35	63.6%	10	18.2%	6	10.9%	4	7.3%

4.4.3　Can-do の修正

検証結果を受け、修正作業に入った。まず、筆者らが各自で全ての Can-do への評価と自由記述で寄せられたコメントの確認と検討をした。1 Can-do に対して一つ以上の観点で 2 名以上から×の評価がついた Can-do を中心に修正案を作成した。次に、全員で改めて全ての Can-do について協議し、一部の Can-do に修正を行った。修正の具体例は、以下の通りである。

（ｉ）記述内容のわかりにくさ

今回の作成方針として、例示を汎用性のあるものとしたが、記述内容があいまい、もしくは現実のコミュニケーションが想像しにくいといった観点②④に該当する Can-do の記述のわかりにくさが指摘されたものは、より具体的な、または現実性がある記述に修正した。

検証前		検証後、修正
お土産を頼むときなど、欲しい商品について、具体的な特徴や欲しい理由などの詳しい情報を、友人に伝えたり、質問に答えたりすることができる。	➡	日本から来る友人などに、どんなお土産が欲しいか聞かれたとき、欲しい商品（浴衣や小物など）について、具体的な特徴や欲しい理由などの詳しい情報を、友人に伝えたり、質問に答えたりすることができる。

図３　「記述内容のわかりにくさ」を理由とした修正例

（ii）B1の言語活動としての記述ができていない

B1レベルの言語活動の特徴であるテキストの長さ、詳しさといった表現がないため、B1より下のレベルに読めるという指摘があった Can-do は、CEFR Can-do と言語活動の関係を再度確認した上で、表現の加筆などの修正を行った。

検証前		検証後、修正
SNS の自己紹介文に目を通して、その人の趣味や関心、自分との共通点など、フォローするために必要な情報を探し出すことができる。	➡	SNS のいくつかの自己紹介文に目を通して、その人の趣味や関心、自分との共通点など、フォローするかどうか決めるために必要な情報を探し出すことができる。

図４　「B1の言語活動としての記述ができていない」を理由とした修正例

その他、トピックの修正は、２～３名から×の評価がついたものを中心に再検討し、言語活動に合うトピックに変更した。以上のような修正を済ませた後、作成した Can-do を一覧にし、改めて全体の表現や内容に大きなずれがないか最終確認をし、全ての Can-do を確定させた。

5. おわりに

本 Can-do 作成は、共通参照レベルの中で特に言語行動やレベルの把握がしにくい B1レベルについて、JF Can-do の充実を図ることにより、課題遂行を目標とした教育実践の支援を目指したものである。結果として、Can-do サイトに B1の JF Can-do が52追加され、利用できる JF Can-do の総数は604（A1：135、A2：191、B1：192、B2：86）とより充実し、幅広いニーズに対応できるようになった。しかし、JF Can-do の数を増やすだけでは、教育現場への支援として十分とは言えない。課題遂行を目標とした教育デザインの方法や、その中でどのように JF Can-do を活用できるのか、情報の提供が必要である。教育現場への支援につながる、JF Can-do を活用した具体的な実践例の提供を更に充実させることが今後の課題となるだろう。

謝辞：JF Can-do の作成・検証にご助言・ご協力くださいました日本語国際センター専任講師の方々に厚く感謝申し上げます。

〔注〕

(1) 本稿における CEFR の用語は、吉島・大橋（2008）から日本語訳を引用したものである。

(2) CEFR の文脈化について、櫻井（2021）では抽象的、概念的な CEFR の理念を、機関や学習者に適用させて教育実践に具体化することと定義している。

(3) JFS の各カテゴリー名には、吉島・大橋（2008）の翻訳を利用せず、カテゴリーの解釈を反映させた独自の訳を使用している。例えば、口頭でのやりとりの“conversation”は、吉島・大橋（2008）では「会話」と訳されているが、JFS では「挨拶、社交辞令、世間話など、社会的な関係を維持するためのやりとりをする」というカテゴリー解釈を踏まえ、「社交的なやりとりをする」と訳出している。

(4) 「インフォーマルな場面でやりとりをする」の A1レベルに利用できる Can-do はない。

(5) A2レベルおよび B2レベルの【意見交換】の特徴の記述は次の通り。カテゴリーごとにレベル別の特徴を記述することで、CEFR と共通のカテゴリーとレベルを維持した JF Can-do の作成につながる。
A2：気楽な友人とのおしゃべりで、興味のある話題（テレビ番組）や体験（異文化体験）などについて質問をしたり答えたり、簡単なコメントをしたりすることができる。
B2：さまざまな話題について友人や同僚に根拠を示して意見を述べたり、相手の意見に対応しながら、活発に話し合うことができる。

(6) 既存 JF Can-do を書き換えたのは、「友人との付き合いなど、人間関係に関する悩み相談と、それに対する助言が書かれた簡単な記事などを読んで、主要な情報を理解することができる。」という JF Can-do である。記事の内容が「人間関係に関する悩み相談」に限定された記述となっており、それ以外の悩み相談を読む活動とは対応付けにくいため、「人間関係や進路などに関する悩み相談と、それに対する助言が書かれた簡単な記事などを読んで、主要な情報を理解することができる。」とより汎用性のある記述に書き換えた。

(7) 既存の CEFR Can-do にも「質問には対応できるが、そのスピードが速い場合は、もう一度繰り返すことを頼むこともある」という Can-do は存在するが、カテゴリーにおける「質疑応答」の位置づけに関して詳細な記述がなされてこなかった。

〔参考文献〕

国際交流基金（2017）『JF 日本語教育スタンダード【新版】利用者のためのガイドブック』、国際交流基金

櫻井直子（2016）「CEFR の理念を基盤としたカリキュラムとはーB1レベルの教科書作成の実践からー」『日本語教育方法研究会誌』23(1)、4-5

櫻井直子（2021）「ヨーロッパの日本語教育の変容と展望ーCEFR の受容と浸透からー」『日本語教育』178、51-65

塩澤真季・石司えり・島田徳子（2010）「言語能力の熟達度を表す Can-do 記述の分析ーJF Can-do 作成のためのガイドライン策定に向けてー」『国際交流基金日本語教育紀要』 6 、23-39

藤長かおる・磯村一弘（2018）「課題遂行を出発点とした学習デザインー『まるごと 日本のことばと文化』中級（B1）の開発をめぐってー」『国際交流基金日本語教育紀要』14、67-82

森本由佳子・塩澤真季・小松知子・石司えり・島田徳子（2011）「コミュニケーション言語活動の熟達度を表す JF Can-do の作成と評価ーCEFR の A2・B1レベルに基づいてー」『国際交流基金日本語教育紀要』 7 、25-42

Council of Europe(2001). *Common European Framework of Reference for Languages: Learning, teaching, assessment.* Cambridge: Cambridge University Press.『外国語の学習、教授、評価のためのヨーロッパ共通参照枠』初版第 2 刷、(2008) 吉島茂・大橋理枝（訳、編)、朝日出版社

Council of Europe(2020). *Common European Framework of Reference for Languages : Learning, teaching, assessment Companion Volume*
＜https://www.coe.int/en/web/common-european-framework-reference-languages＞（2023年 7 月26日）

■英文要旨

Development of B1-level JF Can-do aimed for supporting task-based educational practice

ITO Yukiko, ISEKI Sugako, IKEDA Kanako, KIKUOKA Yuka

This paper describes the development of B1-level JF Can-do based on communicative language activities in "Marugoto: Japanese Language and Culture (Intermediate 1, Intermediate 2)", aimed for supporting task-based educational practice. It reports on the development process that maintained the CEFR illustrative descriptors framework (levels and categories) and the points that were considered for its use in educational settings. To maintain the CEFR common reference levels, the "List of Characteristics of Each Can-do Level" and the structural model of Can-dos were referred in the course of development. Furthermore, JFS categories common to that of CEFR were assigned to the Can-dos based on the characteristics of each corresponding Japanese communicative language activity presented in "Marugoto". Additionally, to enable users to utilize the Can-dos according to their learners and better grasp the level and range of the communicative language activities of B1-level, restrictions to the situations and topics of communicative language activities were minimalized when writing the Can-do descriptions.

■執筆者

伊　藤　由希子　　国際交流基金日本語国際センター専任講師
夷　石　寿賀子　　国際交流基金日本語国際センター専任講師
池　田　香菜子　　国際交流基金日本語国際センター専任講師
菊　岡　由　夏　　国際交流基金日本語国際センター専任講師